

夢と熱

ei_

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

3月のライオンの二次創作です。

(注：桐山君が精神的にも肉体的にも弱っている描写があります。)

夢と
熱

目

次

1

夢と熱

盤の向こう側。誰もいなくなつた座布団に視線を落とすと、零は人知れず…少し深い溜息をついた。

…パチリ…パチリ…

直ぐ隣では、まだ静かな戦いが繰り広げられている。その駒音を聴きながら窓に目を向けると、外は薄暗くなりかけていた。

昼と夜の境目。不明瞭な色の空。赤色を残しつつも姿を隠そうとしている夕日に、零は今朝見た夢を思い出す。

とても暖かい…けれどもう二度と訪れる事のないその光景が、脳裏に残っている。ズキリ…と胸の奥が疼いた。

どうもこの時期はいけない…。世の中の雰囲気も、夏から秋に変わろうとする季節も、何もかも…何処か少し暗い影を持つている。

帰ろう。

零は膝を立ててゆっくり立ち上がる。その途中で、頭から血の気が引いていく感覚がした。

あ……また……。

最近よく起くる立ち眩みの様なもの。しかし、特に気にしなければ……それは静かに去つていく事を零は知つていた。立ち上がってすぐ、視界の端からがジワジワと黒色が迫る。

少しの息苦しさと、目の奥に感じる圧迫感。一瞬だけフワリと平衡感覚が鈍るが、数秒待つか、二、三歩……進むかすると、直ぐに何事も無かつたかのように元に戻つていくそれを、特に気にせず、零は歩こうとした。

……あれ……

戻らない視界……黒に包まれた景色がぐにやりと捻れた。周囲の音がフツと聴こえなくなり、ある一定の音だけが危険を告げる警告音のように脳内に響く。そこで初めて歩きだした筈の体がバランスを保てていかない事に気がついた。

……あ……やば……

パチリ……小さな駒と盤が触れ合う音が聞こえる程、静寂に包まれているその部屋で、ドサツ……と、似つかわしくない音が響いた。

ざわり……

聴覚が正常に戻り、周囲の音を拾い出す……それに続き、じわじわと目の前を覆つていた黒色が晴れ、視覚が元に戻つた。最初に目に入つて来たのは濃い緑色の畳の縁と誰か

の靴下。そして、零は自分の体が畳の上にあるのだと理解した。

「……おい！」

「え……どうした……？」

「桐山！」

「大丈夫か？ 桐山……」

周囲のざわめき……この空間で、明らかに零は注目を集めてしまっている。

ヤバイ……まだ対局中の人もいるのに……

立たなきや……

零は畳に腕を突つ張り、何とか体を起こした。しかし、俯いたまま動くことが出来ない。起こした体が重たい。自分の鼓動がやけに大きく感じる。髪の毛に隠れた額にジワリと汗をかいているのが分かつた。サラサラとした、まるで水の様な汗……。ポタ……タ……と、それは重力に従うまま、畳へと落下していく。

あれ……なんか……

なんか……おかしい……

「桐山……汗が……」

「大丈夫か？ 無理に起きない方が……」

「なに……どしたの？ 貧血？」

「誰か呼んで来て……早く！」

少し足がもつれただけ…

少しバランスを崩しただけ…

ああ：何か言わないと…

大丈夫だと伝えないと…

いろんな言葉が頭の中をめぐるが、どれも口からは出てこない。それは荒い呼吸に変換されてしまう。

なんだ…コレ…

またジワリと視界がおかしくなりだしてきている。畳に突つ張っている腕がだんだんと怠くなってきた。

…ヤバイ……気持ち悪い…

「桐山、一旦ここに横になろう…な？」

誰かが近くでそう言葉を発した。落ち着いた低音の声…。そつと肩を触れられると、優しくその場に横になる様に促される。零は抗う気力もなく、促されるまま…その場にぐたりと横になつた。

冷や汗をびつしよりとかいた額。蒼白な顔色。少し苦しそうな呼吸…。その場に居た誰もが、零の体が正常な状態ではない事が分かつた。

「ヤバイ…顔が真っ青だ…」

「足を上げよう。座布団持ってきて」

「汗が…誰かタオル…」

零は胸のあたりにグルグルと渦巻く気持ちの悪さに耐えられず、そつと目を閉じた。生唾が口腔内に広がっていく。それらを堪える事で精一杯だつた。

自分の身に起こつた事を、まだ把握しきれないまま、零は周囲の言葉をぼんやりと聴いていた。

◇◇◇◇◇

「桐山が倒れたって？」

「あ、会長！」

「対局中にか？」

「いえ、対局が終わつた後です。今、救護室に…。熱があつたみたいで」

「さすがに一人で帰す訳にはいかんな。迎えに来てもらわんと…幸田に連絡したか？」

「いえ…あの…、私もそう勧めたのですが、本人が拒否していく…」

「……どうするかな…」

「俺が面倒みますよ。」

「おお！島田！」

「島田八段：いいんですか？」

「桐山には獅子王戦の時、世話になりましたし。」

「任せてもいいか？一応、幸田には連絡入れておくが…」

「はい。」

「でも…お前、看病疲れして自分が倒れちゃいそうだな！はつはつはつ！」

「ちよつ…会長！そんな事言つちや…」

「…そこまで柔じやないです…。」

◇◇◇◇◇

零は救護室のベッドにぐたりと体を横たえていた。体は氣怠く、頭が重たい。自分が発熱している事には、倒れてから気がついた。

人前で倒れたなんて…川本家の人々には知られたくない。絶対に…。零は両腕で顔を覆うと、はあ…と溜息をついた。

きつい…

眠りたい…

…でも、眠つてしまつたら…

きつとまた…あの夢を見る…

零は最近、昔の夢をよく見ていた。まるで、幼い頃の記憶の蓋が開いてしまったみた

いだ。

もう治つたと思つていた傷が、ズキリと疼いて主張する。後を引くようになにかを残していくその痛みは… 酷く寂しくて…辛い…。

「きついのか？」

不意に声が聞こえた。落ち着いた低音の声…。零は、ハツとして、顔を覆つていた腕をすらすと、島田が零の顔を覗き込んでいた。

島田がここに居る事に、少々驚きつつ「…いえ、だいぶ…マシです…」と答える。島田は「心配したぞ。まつたく…」と言ひながら、溜息をついた。
「今日は俺ん家で泊まりだ。会長命令だから。」

「え…そんな、大丈夫です…帰れます。」

「何言つてんだお前、結構熱あるぞ。」

島田は零の額に触れながら、溜息交じりに「ほら…」と呟いた。

「体調でも崩してたのか？」

「あ…いえ、特にそう言う訳では…。なんて言うか…さつき気がついた…つて言うか

…」

零は、「によ」によと言葉を濁した。

「もうちよいで俺の用事が終わるから、それまで少し寝てろ…。」

そう言い残すと、島田は踵を返して救護室を出て行つた。

零は島田の背中を見送ると、唇から「はあ…」と少し熱を持った息が漏れでた。そつと目を閉じる。

体がきつい…

少しだけ…休もう…

□◇□◇□◇

「桐山…大丈夫か？」

三角が顔を覗かせる。島田は三角の方に顔を向けると、唇の前に人差し指を立てた。
「あ、寝てます？」

三角は部屋に入りながら小声でそう言うと、島田に缶珈琲を渡した。「さんきゅ…」と言いつつ、島田は缶珈琲を開ける。

三角は零の為に買って来たであろうポカリを机の上にコトリと置くと、島田の隣に腰掛けた。

「桐山、体調でも崩してたんですか？」

「倒れてから体調が悪いのに気がついたんだと…」

そう答えると島田は缶珈琲を一口飲んだ。そして「でも…」と言葉を続ける。

「目の下の隈見る限り、あんまり眠れてなかつたのかもな…。」

そう言うと、まだ顔色の悪い零を見つめた。

「倒れた時はマジでビビりましたよ…」

三角ははあ…と溜息をつきながらダラリと椅子の背もたれに寄りかかると、缶珈琲を開けた。

「よく寝てるから起こしたくないんだけど…そろそろタクシー来ちゃうかな…」

「お！島田さん…お持ち帰りで？」

「ああ。病院経由の、お持ち帰りだな…」

「島田さん…看病疲れして、倒れないで下さいよ！」

「そこまで柔じやねーよ…。」

アレ…これさつきも言わなかつたつけ…と思いつつ、島田は缶珈琲をグツと飲み干した。

□◇□◇□◇

夜中。島田は零の寝ている部屋をそつと覗いた。零の目から、静かに…静かに…涙が溢れては零れ落ちていく。

驚いた島田は零の顔を覗き込むが、どうやらまだ眠っているようだ。起こすかどうか、少し悩むが…一先ず零の額に手を当てる。

掌に伝わる熱。さつきから、熱が上がつたまま下がらない。体が辛くて泣いているの

か…それとも…泣きたくなるほどの夢を見ているのか…。どちらにしても零を起こして、解熱剤を飲ませた方が良さそうだ。

「桐山…………」

「…………ん…」

「大丈夫か?…どうした?きついか?」

「……え……あ…。」

涙が頬を伝っている。零は自分が泣いていたことに気がついた。ゴシゴシと手の甲で涙を拭い、消え入るような声で「すみません…」と呟いた。

「熱がさつきから下がつてない。病院で出してもらつた解熱剤飲もう…体起こせるか?」

「…………はい…」

キツそうな表情、緩慢な動作。島田は零が体を起こすのを手伝う。

零はなんとか起き上гарると、島田から薬と水の入つたコップを受け取つた。錠剤を口に入れると、水で喉の奥へと押し込む。

「怖い夢でも見たか?」

島田は零に涙の理由をそれとなく聞いてみた。

「…………いえ…怖くはないです…でも…」

：と言いかけて、零は口をつぐんだ。先ほどの夢が鮮明に零の脳裏に残っている。
 家族で、特別でも何でもない時間を一緒に過ごしている夢。夢の途中で、零は「ああ
 ……これは夢だ」と気がつく。そしてもう二度と、この大好きだった家族が…この優しい
 時間が…戻らないという事に気がつくのだ。

島田はぼんやりと一点を見つめて動かなくなつた零に、「桐山？」と声を掛ける。
 零はハツとして「すみません。ちよつと懐かしい夢だつたので…」とポツリと呟いた。
 「懐かしい」という単語と先ほどの涙。それが一体何を意味するのか…島田はある程
 度察する事が出来た。零の生い立ちはそれとなく知つている。

「温かい茶でも飲むか？」

島田は立ち上がりながら言う。零は島田を見上げて「あ…はい…」と答えた。

島田が淹れた温かいお茶を、ゆっくり時間をかけて飲んだ零は、また布団に横になつ
 ていた。

薬も効いてきたのか、いささか体が楽になつてゐる様な気がした。そつと目を閉じる
 と、すぐにまた睡魔が襲つてきた。

□◇□◇□◇

明け方。島田が零の様子を見にいくと、また目尻に涙が溜まつてゐた。また夢を見て
 いるのだろうか…泣くほど辛く、悲しい夢を…。

島田はその眠りから零を引き上げようとして……やめた。「……違う。」そう思った。もう戻る事のない時間を、景色を、その大切な人達の温もりを……夢の中で感じているのだろう。だから、こんなにも静かに泣いている。

「せめて……夢の中だけでも……。」

島田はそつと零の髪を撫でた。

□◇□◇□◇

朝。

「桐山――やつと起きたか！心配したぞ！」

「二階堂▣なんで……」

「あ――すまん桐山。今日、坊呼んでるの忘れてた……。坊、桐山はまだ熱あんだから、あんま……」

刺激するなよ……と続けたかつた言葉は、二人の大声でかき消された。

二階堂と言い合う零の姿を見て、島田は「ああ……もう大丈夫だ……」と、そう思つた。きつと今までも、どうにかこうにか……自分の過去と、折り合いをつけて来たのだろう。しかし、人の心を救えるのは、やはり同じ人の心だ。

島田は胃のあたりを手でさすると、一人……ふつと笑みをこぼした。

終